札響くらぶ

70

2015. 4

【編集・発行/札響くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付
メール：infomation@sakkyoclub.net
ホームページ：http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

尾高音楽監督に感謝する会
「尾高音楽監督、ありがとう!!」を開催

名曲シリーズのコンサートを終えた平成27年2月7日（土）、会場となるテラスレストラン・キタラにおいて午後4時過ぎから参加者の受付を開始し、参加者にはしおり（B5判、3つ折）を配布、4時30分を少し過ぎたころに尾高音楽監督ご夫妻が入場して、尾高音楽監督に感謝する会「尾高音楽監督、ありがとう!!」が札響くらぶ会員をはじめ40名余りが参加して開会しました。

会の冒頭では、「尾高音楽監督～札響との歩み」として、これまでの指揮者としての経歴、受賞歴や札響での公演歴などのプロフィルが紹介され、続いて、札響での20数年間の写真がスライドショーで映し出され、時々声をあげながら感慨と懐かしさを込めて皆さん見入っていました。

スライドショーの一画面

続いて、上田会長が尾高音楽監督に札響をトップレベルのオーケストラに育て上げてくれたこと、北海道の音楽文化を発展させてくれたこと、小学校6年生を全員キタラに招待するファーストコンサートを自ら指揮してくれたことなど感謝とお礼を込めて「お礼のことば」として話しました。

談笑する尾高ご夫妻と上田ご夫妻

しばらくの歓談後、これまで素晴らしい演奏を聴かせてくれた感謝とお礼を込めて花束を贈呈、上田会長が人形師に依頼して作成したという尾高音楽監督が指揮をしている姿を写し取った高さ30cmほどの尾高人形が記念品として贈呈され、このサプライズに受け取った尾高音楽監督も大変喜んでおられました。続いて、尾高音楽監督から札響くらぶが札響ファンを育ててくれていること、札響を支えてくれていること、ファーストコンサートを聴く小学生が年を追ってマナーが向上していくことなど札響との想い出などを話してくれました。

上田会長から尾高音楽監督に贈られた尾高人形

談笑する参加者一同の会場の様子

そして、参加者のうちから山上光一さんが札響のシベリウスが北海道の地にピッタリと合っており聴くたびに涙を誘うこと、八木幸三さんからはこれから尾高音楽監督指揮による札響の演奏の聴く数が減ることはとても寂しいこと、市川札響事務局長が尾高音楽監督を「忠さん」の愛称で呼ぶようになったことなど、尾高札響の思い出やエピソードを話してくださいました。

市川札響事務局長

東京から参加した原田さん

八木幸三さん

山上光一さん

司会が閉会を宣した後、これまでの会としては珍しく尾高音楽監督ご夫妻を囲み、参加者全員で記念撮影をしました。

（事務局長　武藤義典）

閉会後、尾高音楽監督ご夫妻と参加者で記念撮影

6月・7月の定期・名曲シリーズ演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ会員、北海道作曲家協会会長）

第578回札響定期演奏会

6月19日（金）19：00
6月20日（土）14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／ラドミル・エリシュカ

ラドミル・エリシュカ　©野口隆史

■ベートーベン／交響曲第4番変ロ長調

4年前の尾高・札響によるベートーヴェン・チクルスでは数々の名演が聴けたが、今回は、名誉指揮者となったラドミル・エリシュカがどんなベートーヴェンを聴かせてくれるのか注目の演奏だ。ロベルト・シューマンは、ベートーヴェンの交響曲第4番を「北欧神話の二人の巨人に挟まれたギリシャの美女」と呼んだことは有名な話。この作品は、前後する第3番、第5番とは対照的にベートーヴェンの交響曲中、楽器編成がもっとも小さく短期間で書き上げられた。この時期にはピアノ協奏曲第4番が同時に書かれ、第5番の構想を練っていた時期とも重なる。しかし、ベートーヴェンはこの作品を決して片手間に書いていたわけではない。まず、第1楽章では実に丹念に書かれた序奏部があり、第2楽章の牧歌的楽想は「田園」を、さらに終楽章の律動感は第7番を予感させるなど、その後の交響曲におけるエッセンスが内包されていると言って良い。全体的に明朗な作品の雰囲気は、当時ベートーヴェンと恋愛関係にあったヨゼフィーネ・フォン・ダイム伯爵未亡人への想いが影響しているからだろうか。

■ブラームス／交響曲第4番

ブラームスの交響曲を全般に「渋い音楽」と感じられている方は多いのではないだろうか。特にこの第4番は、まさに人生の苦楽を経験した熟年向きの音楽だ。まず、この交響曲はホ短調という哀愁を漂わせる感傷的な調性ではじまり、第2楽章では長調ながら古い教会旋法のフリギア調を用いて、懐古的な雰囲気を色濃く出している。また、終楽章では、バロック時代に用いられたパッサカリアという舞曲から派生した古い変奏形式を甦らせ取り入れている。全体的に対位法的で、古いゴシック的な印象で管弦楽の編成もオーソドックスでオーケストレーションも極めて古典的に書かれている。そうした新古典主義者らしいブラームスの集大成的作品なのだが、そこに流れる旋律はやはりロマンティックで聴く回数が増すごとに味わいが深まっていくのも事実。エリシュカの深遠な人生観から生まれる燻銀のような第4番に期待がふくらむ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

森の響フレンドコンサート

札響名曲シリーズ

「エリシュカ〜魂の〝新世界〟」
6月27日（土）14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮ラドミル・エリシュカ

ラドミル・エリシュカ　©野口隆史

■ロッシーニ／「ウィリアム・テル」序曲

19世紀前半、イタリアオペラ界で大活躍したロッシーニは39曲（含改作）のオペラを作曲し多くの名作を残したが、37歳でオペラの筆をおき、その後はグルメとしての余生をおくりながら小品を多く作曲し76年の生涯を閉じている。歌劇「ウィリアム・テル」は、彼の最後のオペラで「ギョーム・テル」とも呼ばれている。このオペラは音楽的、劇的構成力の面で作曲者の集大成的大傑作。その序曲はショスタコーヴィチが交響曲のモチーフに取り入れたほど有名で「夜明け」「嵐」「静けさ」「スイス軍隊の行進曲」という4つの接続曲の形をとり、オペラの内容を十分に予知させてくれる。

■リスト／交響詩「前奏曲」

リストは、文学的内容を精神面で追求し、それを音楽上の構成に盛り込んだ交響詩というジャンルを確立した。彼の交響詩は13曲あるが、その中で最も有名なのがこの「前奏曲」である。この曲は、テキストに従って、「人生の輝かしい夜明け」「闘争の嵐」「田園的情景の愛の慰め」「戦いと勝利」の大きく4つの部分に分かれ、他の交響詩にも類似した構成となっている。この曲は、いたるところで演奏されるほど人気が高かったため、作曲者自身が冗談交じりで「公園音楽」と言ったそうだ。

■ドヴォルジャーク／交響曲第9番「新世界より」

「新世界より」は、ドヴォルジャークが音楽院長に就任するためアメリカに渡ったおりに作曲された。素朴なインディアンの民謡や黒人霊歌に強い影響を受け作曲されたが、アメリカそのものを描写したものではない。

彼は、新天地のアメリカに渡ったことで、あらためてボヘミアの精神と故国への郷愁が盛り込まれた新しい音楽を書こうとしたのだ。

つまり後期ロマン派のドイツ的交響曲の形をとりながら、作曲者自身の旋律美を生かし、ボヘミアの民俗要素とアメリカのエキゾチズムという4つの要素が複合した交響曲なのである。もっともアメリカ的要素とは、インディアンや黒人の音楽的素材を意味している訳ではなく、それらの精神性を示している。「新世界」に〝より〟を付けたことで、アメリカから故郷へ宛てたメッセージのような意味合いを持たせたのだろう。誰もが口ずさめる第2楽章の主題は、ドヴォルジャークの代名詞的旋律で後に弟子が「家路」という題名で歌曲にしている。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第579回札響定期演奏会

〜ポンマー首席指揮者就任記念・ライプツィヒ1000年記念プログラム〜
7月10日（金）19：00
7月11日（土）14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／マックス・ポンマー
独唱／針生美智子、安藤赴美子、櫻田　亮
合唱／札響合唱団

マックス・ポンマー　©Thomas Wolter

針生美智子

安藤赴美子
©Shingo Azumaya, Octavia Records Inc.

櫻田　亮　©Ribaltaluce

■シューマン／交響曲第4番

この交響曲は、第4番という番号にはなっているが、第1番と同

じ年の1841年に初稿が完成し初演もされている。しかし、評判があまり良くなく、十年後に改訂され第4番として出版された。初稿に比べ改訂版は、楽器の重なりが多くなり第1楽章での導入部から主題への移行も重々しい。初稿の方が、すっきりとした印象があり、輪郭が明瞭である。ブラームスは、1851年に改訂された分厚いオーケストレーションに対し、新鮮な美しさを持った初稿の出版にこだわっていた。それでは、なぜシューマンは楽器を重ねる傾向を強くしていったのだろうか。シューマンの精神的な疾病の進行状況が影響していると考えることもできるだろう。しかし、彼の詩的なロマンティズムに溢れた美しい旋律やシンコペーションによる弾むような楽想、さらに主題を有機的に展開させる楽章間の統一性を生み出す精緻な構成は、彼自身のオーケストレーションではじめて生彩に描かれる。唐突な例えだが、ひとつひとつの素材を楽しむ「お造り」ではなく、多様な素材を正統法な順序でいっしょに煮込んだ「お鍋」の味わいが、シューマンの響きには感じられる。曲を聴き終えたときの余韻は、ロマン派の香り漂う濃厚なスープのようだ。

■メンデルスゾーン／交響曲第2番「讃歌」

メンデルスゾーンの交響曲第3番や第4番に比べ、第2番は極めて希にしか演奏されない。なぜなのかよくはわからないが、交響曲と言うよりはカンタータに近いからだろうか。

作曲者は、ベートーヴェンの第9交響曲に大いに触発されこの曲を書いたようだが、第1楽章から第3楽章までを管弦楽で演奏し終楽章に声楽を入れる形では、ベートーヴェンの単なる真似と思われることを恐れ、前半の3つの楽章を「シンフォニア」という形でまとめ壮大な序奏のようにしている。そして、後半を9曲からなる合唱やアリアなどの声楽曲に拡大させたため、実質的な交響カンタータとなってしまったのである。この曲を聴くと、主題の雰囲気が、滝廉太郎の「箱根八里」に似ていると思われる方も多いのではないだろうか。滝はメンデルスゾーンの崇拝者でもあり、彼のドイツ留学先はメンデルスゾーンが創設したライプツィヒの音楽院で、1901年に2ヶ月間学んでいる。「箱根八里」の作曲は留学前ではあったが、何らかの形でこの第2番を耳にしているのかもしれない。いずれにしても、この印象深い基本主題が全曲を堅固にまとめている。声楽の歌詞はルターによるドイツ語訳聖書から選びだされ、合唱曲などでの多声的な書法は、ヘンデルの「メサイア」をも想起させる雰囲気を持っている。

（写真協力／札幌交響楽団）

第9回札響くらぶサロン
初のミニ・コンサート開催！

TAKETSU MEMORIAL SALON 第9回札響くらぶサロンが1月11日(日)に教育文化会館401号室(スタジオタイプのお部屋)で開催されました。401といえばチャイコフスキーのピアコン1番とベートーヴェンの3番の聴き比べで使用したお部屋で、竹津さんが「やっぱり聴き比べって面白いですね…」とお元気に楽しそうに話されていたのを思い出しました。その時に「いつかこの部屋でライブやりたいですね…」と言っていたサロン初のミニ・コンサートが念願かなって実現しました。まずはその模様をお伝えします。

ヴァイオリン独奏で登場したのは札響第1ヴァイオリン奏者の河邊俊和さんです。まずはウォーミングアップでヘンデルのヴァイオリンソナタ第6番をピアノ伴奏なしにアレンジして独奏で弾いていただきました。次に指ならしでパガニーニの24のカプリースより数曲、そしてヴァイオリニストのバイブルともいえるバッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番より「シャコンヌ」と第3番より「ガヴォット&ロンド」でした。シャコンヌは私がリクエストしたという事もありますが、目の前での演奏に感動して涙が止まりませんでした。私的なことで申し訳ないのですがライブの感動は涙の量で決まるので、サロン初のミニ・コンサートは大成功だったと思います。アンコールの河邊さんオリジナル曲「優雅な時」と新年恒例の「ラデツキー行進曲」も会場の皆さんの気持ちにピッタリな曲でした。以上第2部の模様をお伝えしましたが、次に第1部の身も心も全てが「フィンランディア」をお伝えします。

札響定期演奏会アーカイブでシベリウスの「フィンランディア」の聴き比べをナビゲーター八木先生のお話で行いました。指揮者が尾高忠明さん・渡辺暁雄さん・オッコ・カムさん（これだけ札響の演奏ではない）。

中学校の音楽の授業風に進められ、「全曲3回聴く事になりますので、終わり頃には頭の中がフィンランディアでいっぱいになるんじゃないかな？」と言っていた通りに、皆さんそうなっていたようです。実は今回の聴き比べは3人の指揮者を当てる「新春お楽しみクイズ大会」形式で行われ正解者17名の中から抽選の結果、川端会員にウォッカのフィンランディアが賞品として贈呈されました。クイズ大会の集計中に八木先生が編曲したホルンとピアノとヴァイオリンとヌソプラノの4人の演奏によるフィンランディアを聴きましたが、これが4人での演奏なの？重厚な雰囲気の中に表われる透明な歌声に感動しました。今回「PMFを応援する会」の方々にも数名ご参加いただきました。第3部は新年会を兼ねた交流パーティー、いつもよりも増して盛り上がった事は言葉にしなくてもわかりますよね！

（事務局次長　上野文博）

第1部の2月の定期の解説を聞く参加者

第2部のミニコンサートでヴァイオリンの独奏をする河邊俊和さん（札響奏者）

第2部のミニコンサートを聴く参加者

♪ 楽員さんに 興味津津！ ⑤ ♬

♬ クラリネット副首席奏者 白子正樹さんに聞く ♪

より深い表現をめざして

プロフィール

京都市立芸術大学音楽学部を首席で卒業。音楽学部賞、京都音楽協会賞受賞。ロームミュージックファンデーションの奨学金を受け渡独し、ケルン音楽大学を最優秀の成績で卒業。第76回読売新人演奏会出演。第５回滋賀県新人演奏会において最優秀賞受賞。第６回パドヴァ国際音楽コンクール管楽器部門第１位。第４回メルカダンテ国際クラリネットコンクール第１位。ケルン Bechsteinhaus においてソロリサイタルを開催。NHK-FM 名曲リサイタルに出演。平成22年度平和堂財団芸術奨励賞受賞。ソリストとして京都市交響楽団、札幌交響楽団と共演。クラリネットを山川すみ男、三界秀実、高橋知己、Ralph Manno の各氏に師事。室内楽を Anthony Spiri に師事。ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団クラリネット奏者を経て、2011年５月札幌交響楽団副首席クラリネット奏者として入団。

♪原点はリコーダー

生まれは滋賀県の大津市です。母は音楽をやりたかったけれど自分はできなかったので、子供たちにはさせたかったのでしょうね、兄弟３人みんなエレクトーン教室に通わせました。僕が始めたのは幼稚園くらいかな？兄も妹もすぐに辞めてしまって、続いたのは僕だけでした。でも、両手両足一緒に弾かなければいけないって訳分かんなかったし、好きじゃなかったんです。

音楽自体は大好きだったので、中学校に入ってすぐに吹奏楽部の見学に行きました。その時、なぜかクラリネットに惹かれたんです。最前列にクラリネットがバーッと並んで３パートに分かれていて面白そうだった。希望の楽器を書かされたのですが僕はクラリネット以外はやりたくないので、第３希望まで全部クラリネット！と書いたんです。吹奏楽部は男子が少なくて貴重だったのか、それならやらせてみようということになったようです。クラリネットに惹かれたのは小学校の時リコーダーが大好きで、めっちゃ吹いていたからかもしれないですね。

♪恵まれた環境の中で

中学校の顧問の先生が素晴しい先生で、各パートに専門の先生を入れてレッスンを受けさせてくれました。その中に石山高校の音楽科の先生がいて、とても面白くていい先生だったのでそこへ行こうかなと。普通科へ行くことも考えていたので、音楽科に行くと決めたのは受験の直前でした。その時は音大に進んで音楽の道へなどとは全然考えていませんでした。石山高校は家からも近いし、音楽科もあるし、面白そうだから行ってみようかなあという感じでした。

家から学校までは自転車で８分くらい。紫式部が源氏物語を書いた石山寺のそばを通って行くのですが、つつじがとてもきれいでいいところです。石山高校はカリキュラムもしっかりしていたし、レッスン室やホールも最新のものが完備され、個人のレッスン室もあって環境は素晴しかったですね。

入学して１年ぐらいたった時、先生も音大に行かそうとするし、男やからちゃんと考えなあかんみたいに言われて真剣に考え始め、結局、京都市立芸術大学に進学しました。札響では物部さんと水戸さんが京都芸大の先輩です。

♪ ちょっとドイツに行ってみよう！

卒業が近くなった時、高校の先生も大学の先生もドイツに行っていた方でしたから、卒業したらドイツ留学というのも考えないわけではなかったのですが、まあその前にドイツはどんな所かちょっと見て来ようと友達と行ってみることにしました。

ケルン音大にいい先生がいて若手でバリバリやっているというのを聞いていたので、レッスン室のドアをトントンと叩いて、ちょっと見せて下さい、と。そういうところ、ドイツの大学ってとてもオープンなんですよ。そしたら本当に口から鱗というか、すごく衝撃を受けるレッスンで、この人になら自分が日本の大学で悶々としていた部分にヒントをもらえそうだと思いました。レッスンも、ここはもっとこうすべきだよ、こうしてみたら、という感じでポジティブにいい風を送ってくれたし、先生の音もすごく好きな音でした。自分が今までやってきたことの上に何かいいエッセンスを与えてくれそうだと思いました。他の大学も見に行く予定だったのに、もうそのラルフ・マノ先生のところに入り浸りでした。

それが４年生の11月で、帰ってきてすぐ大急ぎで奨学金の申請をしました。それに、マノ先生が、「４月に講習会をやるから来ないか」と声をかけて下さったので、「ぜひ！」と。奨学金が間に合ったのもその講習会に行けたのも奇跡的なタイミングでした。でも、だからと言ってすんなり入れたわけではなく、そのクラスはドイツでもかなりの難関で、実際その時は60人受験して２人しか受かりませんでした。その中に入れたのも、今思えば本当にラッキーだったと思います。

ケルン音大でクラリネットのマノ先生と

♪ 芸森はスキー場？！

ケルン音大で３年間勉強しました。卒業試験ではクラリネットクラスで８年間位出ていないという一、〇という最高成績をもらえて本当に嬉しかったですね。

ドイツに残ることは初めから考えていなかったので、帰国して大阪カレッジオペラハウス管弦楽団に。ここは本当に良かったのですが、オペラとバレエが殆どだったのでシンフォニーもやりたいという思いがありました。

そんな時に札響のオーディションの話を聞き、札響の演奏を聴いたことはなかったのですが、尾高さんが長年やられていて本当にきれいな音がするオーケストラだと聞いていましたのでぜひ挑戦したいと思いました。

北海道には一度も来たことがなかったので、ドキドキしながら来ました。オーディションの日はドカ雪の１月12日。忘れられません。バスで芸森に向かったのですが、どこまで連れて行かれるんやろと。入口でバスを降りてしまい、えっ？ここ？と思いながら門を入るとここはスキー場か？というくらい大変な坂道。オーケストラの本拠地が本当にこんなところにあるのか？THE北海道！すごい！と思いながら上って行きました。

そうしたらとてもきれいな練習場があって、札響はこういうとこ

ろで練習しているのか、と衝撃を受けたのを覚えています。

オーディションの後、帰りの快速エアポートに乗っている時に電話で「受かりました」と連絡が入り、興奮して電車の中で大声を上げて喜びました。めちゃめちゃ嬉しかったですね。

♪ 北海道を満喫してます！

札響には2月にエキストラで来て入団は5月です。皆さんいい人で本当にオープンだし、音楽に関してすごく真摯で人間関係の難しさなども一切ありませんでした。

オーケストラ最初の仕事がヨーロッパツアーでした。いい演奏ばかりだったし、なんていいオケなんだ！と感動的でした。

札響はキタラの定期でも地方の村でもみんな本当に一生懸命演奏している。そういう皆さんの心意気が一番素晴しいと思うし、その中に自分がいるということが本当に幸せです。

今は雪なんか全然苦にならないです。冬道は多少怖かったですがこっちで免許も取りましたし。

何と言っても食べ物が美味しい。食べることがすごく好きなので、地方の仕事の時は美味しいところを探して行きますし、普通にスーパーで売っている素材が美味しいので買ってきて作ります。野菜にしてもジャガイモにトウキビ、魚介も初めて生のホッキを食べたのですが美味しいですね。

温泉も大好きで、豊平峡や小金湯、積丹の岬の湯という海の見えるスーパー銭湯みたいなところもよく行きます。

旅も好きです。沖縄の離島や、アジアが好きなのでタイやベトナムにも。台湾は一番良く行きますね。美味しいものもそうですが、知らない文化に触れるのが楽しい。その土地の人、文化、空気に触れ、今までの自分の価値観になかったものとの出会いに刺激を受けますし、お寺や博物館に行ったり土地の人と話をしたりするのが面白いですね。

ザルツブルグに行った時に食べた名物ザルツブルガーノッケルン

♪クラリネットか床山か？

スポーツはしないのですが観戦は大好きです。最近はテニスで、錦織君は有名になる前から注目していました。

実は一番好きなのは大相撲です。中学、高校の頃、魁皇が大関になる前からはまって、相撲事典や魁皇事典を買って相撲用語やルールを調べていました。音楽家になっていなかったら、僕、床山になっていたかもしれません。九州場所以外は全部見に行きました。

♪もっと音楽を感じて

中学、高校で吹奏楽をやっている皆さんに伝えたいことはたくさんあります。僕もやっていたのでよくわかるのですが、吹奏楽では一生懸命練習することや部活動自体が楽しいんですよね。でも、その中で音楽をもう少し感じてほしいと思います。この音はこういう音色で吹きたいな、こういう情景だな、こういう感情を持った音だなとか。極端にいえばもっと明るい音だな、もう少し暗い音を出したいなというふうに感じながら考えながら吹くともっと楽しくなるし、それを続けて行くともっともっと色々見えてきてもっともっともっと面白くなってくるんじゃないかな。自分たちの演奏がどう聴こえているのか、多分あまり実感は持てないかもしれないけれどやはりお客さんありきの演奏なのですから、そういう意識を持つとまた違った見方で演奏できるのではないかと思いますね。

僕自身、オーケストラでも室内楽でもそうですが、音楽自体が持っているものをどうしたらもっと伝えられるのか、表現できるのかということを考えて行きたいと思っています。人数の多いオーケストラの中で自分はどういうふうに音楽を届けられるのか、たとえばモーツァルトの書いた音楽はあまりにも素晴しいけれどどうやればそれを表現できるのかというもどかしさをいつも感じています。オーケストラの中で自分ができることは何だろうと常に考えます。室内楽では個々が影響し合って行けますが、オーケストラの中ではともすれば全体の中に飲み込まれてしまうこともある。もっと表現したいのに諦めてしまったとしたら、それはそれで演奏に別に影響は出ないのかもしれないけれど、そこでおしまい。だから、ここはこういう音がいいんじゃないか、もっとここへ息を入れた方がいいんじゃないかと、大きな意味でのアンサンブルを貪欲にしようといつも考えています。

♪ 聴きあきない音色が魅力

クラリネットは木管楽器の中で一番音域が広く、強弱も出しやすくて物理的に表現の幅が広い楽器なんです。比較的歴史が浅くて、19世紀初頭にオーボエやフルートよりも進歩した形で作られたので、指にしても吹き方にしても構造上やりやすいように作られています。だから自分の思ったことを形にしやすいというメリットがあります。音色もすごく柔らかいし、聴きやすい。低音の美しさもそうですが、音域的にずっと吹いていても聴きあきない。それがクラリネットの一番の魅力かな。どの楽器もそれぞれの音色が魅力なんですけれどね。

♪表現を磨くということ

クラシックってどこまで掘り下げて行っても深みがあるというところが魅力だと思うんです。奏者にとっても聴き手にとっても。同じ曲でも環境や演奏者、自分が変われば違ったものに感じるように、常に音楽は変化します。変化するから面白い。例えば、今の自分がこれが良いと最善を尽くしても、一年後、あるいは一カ月後、極端にいえば明日は全く違う景色が見えるようになっていて、出てくる音楽が変わる。終わりがないんです。より良い音楽を求め、様々なことを感じ、考えて行くことで表現は磨かれていくと思います。自分がどこまで感じ表現できるのか、いつまでもそういうふうに自分を高めて行きたいと思います。

若い人たちにも自分がドイツで感じたこと、学んだことを教えていきたいですね。日本人は、技術は素晴しいのですがそれに伴うメンタルや表現する手法、表現に関するイメージがどうしても足りないし、そこを教えるシステムみたいなものが足りないのかなということをドイツに行った時にすごく感じたんです。日本人が自分を表現することが苦手なのは、相手の気持ちを思いやるとか、和を重んじるとかという日本人特有の奥ゆかしさ、メンタリティのいい部分でもあります。でも、こと音楽に関しては自分を出すこと、表現することが大事ですから、心を磨いていくことや音楽の経験値を増やしていくことといったアプローチのヒントをあげることができれば、若い人たちが活躍する道を開ける手助けができるんじゃないかなと思います。

そんな日を夢見て、これからも頑張ります！

イタリア、モンテプルチアーノの講習会でのひとコマ

2014年2月6日
テラスレストランキタラにて
担当・井上、村山、中居

札響台湾公演を聴いて

札響くらぶ会長　上田文雄、札響の「台湾感恩之旅」台北公演を聴いた。尾高札響の最終公演の意味合いもあるこの公演、尾高札響の最終形を見届けたい、そんな思いから企画が発表された直後から参加する意思を固めた。もちろん「食の台湾」の楽しみも当然抜きがたい旅の魅力だ。私にとって4回目の台湾であったが絶品の熱々「小籠包」、激辛「火鍋」を味わいたいとの期待も裏切られることのない旅となった。

参加できた3月22日と3月23日の台北公演について報告をさせていただきます。

3月22日

演奏会は午後2時から「国家音楽廳」という台湾随一のコンサートホールでの公演は2、000席が満席。プログラムは2月27日札響名曲シリーズvol.5と同じ札幌出身の新進気鋭のヴァイオリニスト成田達輝によるメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲とラフマニノフの交響曲2番がメイン。冒頭に武満徹の「死と再生」が荘厳な弦の響きで演奏され、東日本大震災で多くの犠牲を出した日本にいち早く多大な支援をしてくれた台湾の人々への「感恩」＝感謝を伝えようとの想いが表現され、感動がホールを包んだ。

引き締まったコンサートホールに成田さんのキラキラ輝くメンコンが堂々と響き渡り、そのコントラストも感動を倍加させる効果があったように思えた。

2月27日の札幌でのアンコールはパガニーニの奇想曲等3曲が演奏されその確かな超越技法とサービス精神に驚かされましたが、この日は奇想曲1曲が披露された。台北の聴衆を圧倒するそのテクニックと音楽性に満来の拍手が止まなかった。

ラフマニノフの「交響曲2番」は尾高監督とともに鍛え上げられた札響伝統の透明感あふれる弦の響きと絶妙な管楽器とのコラボでロマンティックを歌い上げる、ある種の凄みを感じさせるほどの名演で観衆を魅了した。圧倒的な満足が会場を支配し、拍手・拍手のあと最初にオケが鳴らしたのが「ハッピバースデイ」、翌日がこの演奏会のスポンサーになった台新銀行の創立記念日とのことで感謝を込めてお祝い演奏でした。一気にホールが和んだところで尾高監督が震災後の支援への感謝を述べるとともに「台湾の皆さん、どうぞ北海道にお越し下さい」との挨拶が行われました。

アンコール曲は台湾人なら誰でも知っているという「望春風」。日本統治下の台湾人作曲家の作品だと聞くが、日本人にとってもどことなく懐かしい調べであって、統治被統治という歴史を別にしてアジア人の共通感性のようなものを感じた。おそらく札響の楽員もそうではなかったか。演奏家の心と聴衆の心がホールでしっかり融け合った素晴らしい瞬間でした。私の隣席で鑑賞されていた台北副市長の周麗芳さんは私に抱きつかんばかりの感動を表現されていた。

演奏会が終了後、尾高監督と成田達輝さんのサイン会が開かれ、約1時間長蛇の列をなした台北市民札響ファンに丁寧にサインサービスと写真に応じて居られました。

因みにこのコンサートホールの音については、何人かの楽員の皆さんの感想ではステージ上で音の塊を感じづらく不安に思えたとのことでしたが、客席ではとてもよい響き、キタラのようなクリアでありながら温かさがある音ではないけれど、木に良く包まれたようなアナログの良さとでも表現したら良いのでしょうか。暖かく心地よい響きをもった素敵なホールで札響の魅力を味わうことが出来ました。

3月23日「台北静修女中」

台北2日目は、台北静修女子中高校での学校公演です。札響は音楽教室やキタラ・ファースト・コンサート、そして全道179市町村全ての町や村で演奏会を開いている実績（この4月16日とうとう最後に残っていた島牧村での公演が行われ全道制覇の快挙を達成した、Bravo!!札響）がものをいい、実に手慣れた演奏会で初心者である女子中学生・高校生約3、000名を音楽の世界に導いてくれた。その中には同校の同窓生であるお祖母ちゃん達も数十人おいでになっており、一緒に楽しまれました。「威風堂々」や楽器紹介、「日本民謡メドレー」最後はラデツキーの手拍手参加で大盛り上がりの一時間。大歓声と発熱会場でした。

（余談）

静修女子校での演奏会終了後、校長先生に校長室へと案内されしばし歓談させて頂いた。私は校長先生に、札幌には静修高校という同じ名前の私立高校があるけれど交流をしてみてはどうですか、と提案をしましたら、大変関心を示して頂けました。帰国してすぐ札幌静修高校に出向きそのことを伝えしました。同校も前向き姿勢を示されましたので、今後交流が始まるかもしれません。（4月19日記）

「札響楽員物部憲一さんの古楽器を使った演奏会は新しい発見でした」

去る2月15日の日曜日の昼さがり、西区八軒にあるレッドベリースタジオ40席満席で息遣いまで聞こえる雰囲気で、物部さんが演奏するバロックヴァイオリンの響きを楽しんできました。

バロックヴァイオリンに対して現代使われているのをモダンヴァイオリンと呼んでいるそうです。写真にもあるように形はモダンヴァイオリンとほとんど変わらず、バロックは弦が羊の腸をより合わせて作られているそうで、湿度に敏感で都度、調弦が欠かせないようです。弦を弾く弓が違い、張りを支える部分がバロックでは弓矢の弓の形状で、モダンは逆そりになっています。バロックチェロの藤田淳子さん、チェンバロ近江安さんを加えて演奏会の始まりです。

札響楽員だった故石原ゆかりさん、故三原愛彦さんへの追悼曲としてバロック時代に活躍したオーストリアのヴァイオリニストであったビーバー（Biber）作曲のパッサカリア（Passagalia）が献呈され、羊腸弦特有の柔らかい音色と程よい音量が物部さんの精緻な演奏によって祈りの雰囲気が創られまるで語りかけてくれるようでした。私達も思わず涙する瞬間でした。バロックヴァイオリンの奏でる音色が新しい発見でした。

「なぜ古楽器演奏活動を？」と物部さんに尋ねたところ、～あるイギリス人が「バロックは語る楽器でモダンは演奏する楽器」と言ったそうです。きっとバッハもこの音色を聴いて沢山の作曲をしたのだと思う。バロック時代の音楽に焦点を当て、沢山の良い曲により深く光を当てていきたい～と語っていました。

「MUSICA ANTIQUA古楽への誘い」シリーズは私にとって外すことが出来ない演奏会のひとつとなりました。（西川吉武）

バロックヴァイオリン（右）とモダンヴァイオリン（左）の違いを説明する物部憲一さん（札響ヴィオラ奏者）

札幌トロンボーン四重奏団
第5回演奏会を聴いて

2月4日夜、例年より暖かいとは言え、夜はまだ冷え込む季節だったけれど、札幌サンプラザ・ホールは、中学生・高校生たちの若さで熱気にあふれていた。

札幌交響楽団
トロンボーンセクションによる
札幌トロンボーン四重奏団
第五回コンサート

先日、中野耕太郎さんがトロンボーンは、「音域も広く同じ楽器だけのカルテットとしてはすごくいいハーモニーです。」とおっしゃっていたので、カルテットの定期演奏会を心待ちにしていたところ、パンフレットを見つけたので、早速チケットを買って期待に胸弾ませて出掛けた。

田中徹さんの曲の紹介もすっきりと解りやすく、「神聖な楽器で教会の聖歌隊の伴奏で使われ始めたのです」と説明が有った。

いつもはオーケストラの中に埋もれてしまい、ソロのあるときは別として、部分的にしか聴かれないので、四重奏はトロンボーンだけを、楽器の魅力のすべてを聴くことが出来て満足した。

特にプログラム後半でリチャーズの「トロンボーンの為の組曲」は楽器の特徴が良く出ているので官能的と言いたいほど心に響いた。

また、プログラム前半のクラシックな曲とは楽器を変えていたのには驚いた。

一緒に行った人達とお茶を飲みながら感想を話し合った時、仲間の一人がトロンボーンの特に印象に残っている話をしてくれた。

ローザンヌのお城を会場に使った国際学会で開会式のファンファーレがトロンボーンで演奏され、そのやさしい音色と、主催者のセンスにいたく感動した…と。

メンバーの皆さんは腹筋を使う楽器だからでしょうね、すっきりとしたスタイルで、ベテラン二人の渋い魅力とハンサムな若い二人のカルテットは観賞的にも素敵なハーモニーでした。

（井上）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

附記、代表の田中徹さんから、

「2月16日（月）に東京都新宿区新大久保の管楽器店タグの地下にある「スペースDo」に於いて同じプログラムでの公演がありこちらも盛況のうちに幕を閉じました。札幌公演同様5年間支えて下さった皆様に感謝するとともにメンバー一同今後もなお一層の精進を重ねてまいります。」とのひと言をいただきました。

BUNYA TRIO Consert Vol. 1

3月13日（金）ザ・ルーテルホールでの第1回となる新堀聡子さん（ピアノ）、岡部亜希子さん（ヴァイオリン）、文屋治実さん（チェロ）によるBUNYA TRIO Consertを聴きに行ってきた。このトリオは、2014年9月13日に小樽潮陵高校でわれた「第32回潮陵記念館コンサート（文屋治実（チェロ）と仲間たち）〜室内楽の夕べ〜」がきっかけで結成され、年2回程度のコンサートを予定しているという。

今回のコンサートは、アレンスキーのピアノ三重奏曲第1番ニ短調作品32とチャイコフスキーのピアノ三重奏曲イ短調作品50の2曲、ともに追悼のために作曲されている。

アレンスキーの曲は、サンクトペテルブルク音楽院でチェロを教えていた名チェリスト、カルル・ダヴィドフの死後5年後に追悼のために作られているが、曲そのものは暗く悲愴なものではなく、むしろ華麗で優雅、叙情的なもののように感じられた。

チャイコフスキーの曲は、「偉大な芸術家の思い出に」という副題が付されており、旧友のニコライ・ルビンシテインを追悼する音楽となっている。曲は2楽章からなっているが、特に第2章の演奏は高度な演奏技巧が必要とされるといわれているが、3人はこれを見事に演奏しきり、ブラボーの声もかかったほど素晴らしい演奏となった。この次のコンサート（10月6日（火）ザ・ルーテルホール）もぜひ聴きに行きたいと思っている。

アンコールは、グリンカの悲愴三重奏曲第3楽章、失恋をうたった曲のようです。

（武藤）

右から岡部亜希子さん（ヴァイオリン）、新堀聡子さん（ピアノ）、文屋治実さん（チェロ）

札響定期演奏会
中学生招待事業の報告

1月31日（土）は私たち札響くらぶにとって記念する日となった。それは札響定期演奏会（B日程）でキタラが念願の〝ほぼ満席〟となったからだ。いつも空席が目立つP席、LA席、RA席、RC席が124人の中学生で埋まった状態はまさに圧巻だった。何よりも「中学生招待事業」が札響に多少なりとも貢献できたことが嬉しかった（入場者の約7％）。当然のことながらステージは大変な盛り上がりを見せた。ソリスト・指揮者は勿論、団員の方たちの頬も紅潮し興奮していたのが判る。演奏後は客席の彼方此方からブラボー！の声と拍手が鳴り止まず、私は思わず目頭が熱くなった。当日招待した中学生にも貴重な体験になったと思う。また、駐車場に㈱そよかぜ観光の送迎バスが5台並んだ姿も初めての光景で、実に壮観であった。

3年前に札幌市職員福利厚生会の厚意で始まった「中学生招待事業」はお陰様で順調に推移している。中途で中・小型バスの確保や、国土交通省の指導によるバス料金の値上げなど苦難を余儀なくされた時期もあったが、その都度㈱そよかぜ観光の「札響くらぶ」に対する理解と絶大なる協力を得て今日に至っている。

その結果、24年度463名、25年度437名、26年度440名、3年間で合計43校、1340名を招待できた。この事業が好評なのは「札響の生の演奏を音響の素晴らしい札幌コンサートホールで聴ける」「札響の定期演奏会に招待する中学生を貸切バスで送迎する」ことの2点に尽きる。

招待した生徒・先生たちから毎回のように礼状を頂き恐縮する。（白石中学校と北辰中学校の皆さんからの手紙は、次回7月発行の第71号に掲載の予定）

中学生たちが将来、札響くらぶの会員と札響の定期会員になってくれることが夢なので各機関のご協力のもと今後も事業を継続・発展をさせていきたい。

（招待事業担当　佐藤高明）

27.1.31の中学生招待事業でキタラの駐車場に5台並んで駐車した㈱そよかぜ観光の送迎バス

随想 本棚の隅から 11

明上山貴代

古い本棚の前で重箱の隅ばかり突っつかないで、年寄りみたいに過去を振り返らず、好奇心満々に前を向いて行こう。今年最初に出掛けたKitara小ホールのコンサートを取り上げましょう。

2015年1月23日　ベルリナー・ベーレン第6回演奏会
「スタインウエイ&ベーゼンドルファー」二大銘器の饗宴」

①スタインウエイ
モーツアルト　ピアノソナタ　大平由美子
シューマン＝リスト　献呈　石田敏明

②ベーゼンドルファー
シューベルト
3つのピアノ曲第二曲変ホ長調　景山裕子
ブラームス　4つのピアノ曲
第四曲狂詩曲変ホ長調　吉泉善太
バッハ＝ブゾーニ
無伴奏パルティータ第二番
二短調シャコンヌ　石田敏明

③ベーゼンドルファー
ドビュッシー
前奏曲第一番第10曲沈める寺　大平由美子
バルトーク
組曲「戸外にて」より
第1曲笛と太鼓第4曲夜の音楽

④スタインウエイ
リスト　スペイン狂詩曲　吉泉善太

⑤スタインウエイ&ベーゼンドルファー（2台4手）
メンデルスゾーン
アンダンテと華麗なるアレグロ　明上山貴代&景山裕子

メーカーの違う2台のピアノを聴き比べるのは初めてなので興味津津でした。ベテランばかりの演奏はとても素晴らしく、なかでも石田敏明さんがひときわ印象に残り、大平由美子さんの「沈める寺」しみじみ心に沁みました。

吉泉善太氏のお話の中でピアノを車に例えるとスタインウエイはフェラーリでベーゼンドルファーはベンツのようだと言ったけれど、私はベーゼンドルファーのあの重低音と残響はディーゼルエンジンのトラックのようで、スタインウエイの切れの良さと安定感がベンツのようだと思いました。

残念ながらフェラーリに乗るようなスノッブなボーイフレンドを持ったことが無いので…。

運転はしない、ピアノは弾かない、あくまでも聴き心地と乗り心地の感想です。ごめんあそばせ…。

尤もスノッブな中婆（井上明子）

花束贈呈

3月末退団、芸森にて

コンサートマスター　伊藤亮太郎さん

「札響が最初のオーケストラです。この10年間、尾高マエストロと国内外の大勢の指揮者に出逢い、また楽員のみなさんにもとても勉強させてもらいました」

3月末退団、キタラにて

テンパニー首席奏者　武藤厚志さん

「札響に入って僕自身の音楽がとても充実したものになったと思います。また札幌に遊びに来た時にお会いできたら。本当にありがとうございました。」

4月末退団、キタラにて

フルート副首席奏者　森　圭吾さん

「29年ンか月、ありがとうございました、長々と。札幌を去ってもこれまで以上に応援して下さい。帰ってきます。I will be back!!」

スタッフの活動報告（平成27年1月～3月）

●第9回札響くらぶサロン開催
1月11日（日）17：30～21：30
札幌市教育文化会館4階401号室
担当・参加者／上野事務局次長他40名余
第1部は八木幸三氏による2月、3月の札響定期演奏会のお話、第2部及び第3部は札響ヴァイオリン奏者河邉俊和氏によるミニコンサートと交流会を開催、次回は5月に開催予定です。

●会報「札響くらぶ」第69号発行
1月20日（火）15：00～17：30
札幌コンサートホール2階大会議室
担当・参加者／事務局長他10名
会報「札響くらぶ」第69号を800部発行し、会員、ファンクラブ、報道機関、札響関係に約600部配布、発送しました。

●第10回札響くらぶ運営会議開催
1月20日（火）18：00～20：00
札幌コンサートホール大会議室
担当・出席者／事務局長他12名
会議において、会報第70号の掲載記事、「尾高監督、ありがとう!!」、第9回札響くらぶサロンの報告、中学生招待事業などについて協議、次回は2月20日（金）にで開催することとした。

●尾高音楽監督に感謝する会「尾高音楽監督、ありがとう!!」開催
2月7日（土）16：30～18：00
テラスレストラン・Kitara
担当・参加者／事務局長他40名余
会には、尾高音楽監督ご夫妻、上田会長ご夫妻も参加され、会長のお礼のことば、思い出の写真のスライドショー、会長が特注した尾高人形の記念品贈呈、尾高音楽監督からの話や会員からの想い出・エピソードなど、内容盛り沢山の会でした。

●第11回札響くらぶ運営会議開催
2月20日（金）18：00～19：50
エルプラザ18人用会議コーナー
担当・出席者／事務局長他8名
会議において、会報第70号の掲載記事の一部変更、年会費の改訂、平成27年度札響くらぶ総会の開催などについて協議、次回は3月25日（水）に開催することとした。

●第12回札響くらぶ運営会議開催
3月25日（水）18：00～20：00
札幌コンサートホール大会議室
担当・出席者／事務局長他16名
会議において、平成27年度札響くらぶ総会、年会費の改訂、第578回定期演奏会練習見学会、第10回札響くらぶサロンなどについて協議、次回は4月28日（火）に開催することとした。

編集後記

◆佐藤郁子さんや物部さんの演奏会を聴いて、楽員さんの個人演奏会も注目かもしれないと思いました。雰囲気がよく息遣いまで伝わり、感動もひとしおです。皆さんも足を運んでみてはいかが！（西川）

◆札響くらぶサロンにおける初のミニ・コンサートの開催。同じ曲の聴き比べとミニ・コンサートは竹津さんが強く望んでいました。9回目で実現しましたがどうだったのかな～。参加された方々に感想を聞いてみたいです。（上野）

◆楽員がゲスト出演する小学校のブラスバンド卒業定期演奏会で、生徒の尊敬と憧憬に輝く瞳が印象的でした。東日本吹奏楽大会で「金賞」を受賞する迄に指導をされた楽員に惜しみない拍手を。（井上）

◆先日、尾高監督を囲んで思い出にと集合写真を撮りました。ご希望の方にはデータか、プリントしたもの（実費負担で！）をお送りできます。メール、はがきなどで連絡下されば。キタラが再開した後のデスクでもいいです。（静）